

聖書：マタイ 24：15～31

説教題：人の子が天の雲のうちに

日時：2020年6月7日（朝拝）

イエス様が「エルサレム神殿の崩壊」と「世の終わり」とをダブらせながら語られたオリーブ山講話の第2回目です。エルサレムの宮を出て行かれる時、その建物に目を見張っていた弟子たちを見て、イエス様は「どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません」と2節で、エルサレム神殿崩壊について予言されました。これはこここそ神が特別に臨在される神聖な場所とより頼んでいたユダヤ人にとって耳を疑うような言葉でした。しかしこれを受け止めた弟子たちは、オリーブ山で座っていたイエス様に3節でこう尋ねます。「お話してください。いつ、そのようなことが起こるのですか。あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか。」この問いに答える形でイエス様が終末に関するメッセージを語られたのが、このオリーブ山講話です。イエス様はここで弟子たちが問うた二つのことをダブらせる仕方で語っています。これは重なり合う山々を私たちが遠くから見つめる時に似ています。それらの山々は実際には相当距離が離れているにもかかわらず、私たちの目にはすぐ近くに並んでいるように見える場合があります。たとえばある山の後ろに富士山がすぐくっついて立っているように見える時がありますが、実際には二つの山の間にはかなりの距離があるものです。それと同じようにイエス様はこの後の歴史の一つのピークであるエルサレム神殿崩壊を見つめて語っていますが、同時にその背後に重なって見えるこの世の終わりについても一緒に語っておられるわけです。ですからここにある言葉は、どこからどこまでがエルサレム神殿崩壊に関することで、どこからどこまでが世の終わりに関する言葉であると明確に区別できるとは限りません。両者に共通する部分、オーバーラップする部分もあります。そのことを念頭におきながら読むことが必要と思います。

この箇所は大きく3つに分けられると思います。その第一は15～22節で、ここでは特にエルサレム神殿崩壊に焦点が当てられています。最初の15節に難しそうな言葉が出て来ます。二重カギカッコの『荒らす忌まわしいもの』とは何のことでしょう。これはダニエル書の預言と関係します。ダニエルは紀元前500年代に活躍した預言者ですが、彼はダニエル書の中で繰り返し「荒らす忌まわしいもの」が聖なる所に立つ時が来ることについて預言しました。それは具体的には紀元前167年にシリアの王アンティオコス・エピファネスにおいて成就しました。ちょうど聖書が沈黙している時代に起こった

ことですので、聖書に彼の名前は出て来ません。ですから聖書によく親しんでいる人でも、一体彼は誰なのかと珍紛漢紛になるかもしれません。しかし当時のユダヤ人たちは良く知っていました。彼はイスラエルの上に支配権を持ち、多くのユダヤ人を処刑し、律法順守を禁じ、聖書の写本を焼き、エルサレムの宮にゼウスの神を祭って、これを拝むように強要した人です。まさにダニエルが預言した通りの恐ろしいことが彼において起こったのです。

しかしイエス様はこのダニエルの預言に訴えて、あの「荒らす忌まわしいもの」が聖なるところに立っているのを見たら、と言われます。しかも「よく理解せよ」と言われています。つまりイエス様が言っていることは、ダニエルの預言は紀元前 167 年の出来事ですべて終わったのではないということです。その第二の成就とでも言うべきことが、これから起こる。それが紀元 70 年のエルサレム神殿崩壊です。その時、ローマ軍のティトスがローマ皇帝の像を刻んだ軍旗を神殿に持ち込みます。そしてエルサレムは破壊されます。あのダニエルの預言のさらなる成就が起こるのです。

イエス様は言います。「ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。屋上にいる人は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはいけません。畑にいる人は上着を取りに戻ってはいけません」と。人々はローマ軍に攻め込まれた時、神殿に逃げ込めば神が守ってくれると考えるかもしれません。しかしそういうことはないのです。エルサレムへのさばきは確実に起こります。神殿は破壊されます。だから山へ逃げよと言われていました。山に逃げてどうする？と思われるかもしれません。しかし見える何かに頼るのではなく、このように言われた主の言葉に従って、神の守りの御手の中に自分を置くのです。19 節にあるように、「それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。」 また「あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい」とも言われています。冬は移動が困難ですし、安息日も移動の障害となることが考えられます。21～22 節は、エルサレム神殿崩壊とこの世の終わりが二重写しで語られている部分と言われます。「そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決していないような大きな苦難がある」と言われています。確かにこれはエルサレム神殿崩壊時の大変な苦難を強調する言葉のようでもありますし、また終わりの日直前の非常な困難な時について語っているようでもあります。そんな中、22 節は大きな慰めを与えてくれます。これまで経験したことがないような大変な苦しみの時がこれからやって来ますが、だからと言って単なる無秩序の状態に陥るのではない。その状況をしっかり支配くださ

っている方がおられます。それは神様です。神は選ばれた者たち、ご自身の民に究極的な害が及ぶほどには、その期間を延ばさないとされています。つまりその苦難のただ中に神が介入してくださるのです。全能の御手をもって、より頼む者たちを支えてくださる。この神の絶対的な守りと慈しみを信じて生きるようにとされています。

第二の部分は 23～28 節。ここは主が再臨される直前までの時代に焦点が当てられています。29 節で「そうした苦難の日々の後、ただちに、云々」と、いよいよキリストが現れる最後の時のことが記されますが、その最終段階に入る手前までの期間のことです。ここに記されていることは、すでに 4～5 節でも述べられていました。偽キリスト、偽預言者が現れることについてです。困難な時代の中、「見よ、ここにキリストがいる」とか、「そこにいる」と言う人たちが出て来る。困難な毎日を過ごしている中で多くの人々は救い主を自称する人々の声に聞いてしまうのです。それにすぎり、そして騙されてしまう。さらに 26 節には「見よ、キリストは荒野にいる」と言う人が出て来ると言われています。バプテスマのヨハネがそうだったように、人里離れたところに救い主は現れた！だからそこへ行こう！と誘う人が出て来る。あるいは「見よ。奥の部屋にいる」と言う人もいる。人目につかない密室に。限られた人しか見ることができない特別な場所に。しかしイエス様はそのような言葉を信じてはいけないと言われます。27 節でイエス様はこう言われます。「人の子の到来は、稲妻が東から出て西にひらめくと同じようにして実現するのです。」 雷が鳴って稲妻が光れば、遠くにいる人々も一瞬にして気づきます。そのようにイエス様の再臨は誰かに教えてもらわなくても分かる出来事として起こるのです。イエス様は再臨されたのに私だけが知らないというような状況は起こらないのです。イエス様が来れば、すべての人は瞬時にそのことが分かるのです。

28 節は不気味な表現です。「死体のあるところには、禿鷹が集まります。」 謎めいた言葉ですが、文脈に沿って 27 節と同じことを別の言い方で現したものと読むことができます。死体があれば禿鷹が上空を旋回するようになります。ですからそれを見れば、死体が近くにあるのだらうと分かる。それと同じように主の日が来ればみなに分かるのです。キリストはあつちに現れたからあなたも行きましようというような声に乗っかってはならないのです。来たらすべての人に分かる。そのことを心に留めて騙されないように！ということです。

最後 29～31 節は、この世の最後の時に焦点が当てられている部分です。今まで見て

来た苦難の日々の後、ここにあるような天変地異と表現されるような現象が起こると言われています。これはこのまま字義通りに取る解釈と、また旧約聖書のイザヤ書等の用法を背景として異教の国々へのさばきを象徴する表現と見る見方とがありますが、一般的には字義通りに取る学者がほとんどのようです。この世界がいよいよさばかれる最終局面において、現在の世界や宇宙の秩序が崩壊するようなことが起きて、それは自然なこと、むしろ必然的なことと言えるのではないのでしょうか。

そのように天地が揺り動かされるただ中で、人の子すなわちイエス・キリストの再臨が起こります。まず「人の子のしるしが天に現れる」とありますが、これは具体的に何を指しているのか分かりません。主の再臨に先だって何らかのしるしが現れるのでしょうか。そうしてキリストが現れます。「天の雲のうちに」また「偉大な力と栄光とともに」と。「雲」は聖書全体を通して神の臨在を象徴するものとして使われて来ました。モーセがシナイ山で十戒を授けられる時も、密雲が山の上にありますし、荒野を旅したイスラエルも昼は雲の柱によって導かれました。また幕屋を建設した時も、ソロモンが神殿を奉献した時も、雲が宮に満ちましたし、この福音書 17 章でペテロ、ヤコブ、ヨハネが高い山で、イエス様が栄光の姿に変貌された様子を見た時も雲が彼らを覆いました。その雲のうちにイエス様は偉大な力と栄光とともに来られます。私たちはこのイエス様のお姿をよく思い巡らすべきだと思います。イエス様は1回目は低い姿で、貧しい姿で、輝きもなく、人々が見とれる姿もない状態で来られました。しかし2回目のご自身の栄光をはっきり輝かせて来られます。ペテロとヤコブとヨハネは高い山でイエス様が太陽のように輝く姿を見ましたが、それ以上の姿をすべての人がこの日には見るようになります。あるいはパウロはダマスコ途上で栄光に輝く主を見つめて倒れ伏し、そのあまりの素晴らしさに全く魅了されることになりましたが、その栄光に輝くイエス様の本当のお姿を、この日にすべての人々ははっきり見るようになるのです。

その方の前に2種類の人々がいます。一つは30節に「胸をたたいて悲しむ」と言われている人々です。これは栄光のイエス様を見て、あ～我々は愚かだった！と嘆く人々です。この方を信じないまま我々はこの日を迎えてしまった！これではどうなることか！もう今からでは取り返しがつかないと嘆く意味での悲しみです。この日に起こることとして、この福音書の13章41～42節にはこう言われていました。「人の子は御使いたちを遣わします。彼らは、すべてのつまずきと、不法を行う者たちを御国から取り集めて、火の燃える炉の中に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。」

このさばきを予期して悲しむのです。もう一方の人々とは 31 節にある「人の子が選んだ者たち」、すなわちイエス・キリストを信じ、この方により頼んで来た者たちです。その者たちはこの日に集められます。天の御国に入れられるためです。「天の果てから果てまで四方から」とありますように、世界のどこにいても必ず探し出されてこの祝福に入れられます。漏れることはありません。ですからこの日は主を信じる者たちにとって怖い日ではないのです。むしろ待ち望んだ救いについて入る日です。テサロニケ人への手紙第一 5 章 9 節：「神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」 また先ほど参照したマタイの福音書 13 章 41～42 節の次の 43 節に「そのとき、正しい人たちは彼らの父の御国で太陽のように輝きます。」と言われていました。私たちはその日、栄光に輝くイエス様をお迎えしますが、その者たち自身が太陽のように輝くという祝福が天の御国では用意されているのです。

以上、オリーブ山講話の第二回目となる部分を見て来ました。エルサレム神殿崩壊と重ね合わせる仕方で、これから世の終わりに向かってどういうことが起こるかについて語られたイエス様の言葉を私たちはどう聞くでしょうか。あまり気に留めたくない言葉だったでしょうか。考えたくない話だったでしょうか。しかし聖書から明らかなのは、義なる神の前に罪ある状態であるこの世界はいつまでも続くものではないということです。やがて必ずその罪が裁かれる日が来ます。この世界はさばかれることへ向かっています。そして今日の箇所を通して心に留めるべき重要なことは、その日に向かって大きな山はすでに越えたということです。エルサレム神殿崩壊という出来事は、すでに起こった過去のことで、今日の私たちには関係ないというわけではありません。エルサレム神殿の崩壊は、今日の私たちに大きなメッセージを持っています。それはそのことが実際に起こったということは、その後に来ると言われている世の終わりのさばきも必ず来る！ということの意味しているということです。ですから今日の私たちはこの言葉が語られた当時の人々よりも、もっとこのメッセージを確信できる立場にあります。いや確信しなければなりません。重なり合う手前の山を越えたということは、その後ろに待ち構えるより大きな山に私たちははいよいよ確実に近づいているということです。私たちはその日が来た時、こうなるとは思わなかったなどと弁解することはできないのです。世の終わりのさばきの前兆となるエルサレム神殿崩壊が起こったのですから、それが指し示す本当の崩壊の日、この世界全体のさばきの日ははいよいよ迫って来ているのです。

しかしこのオリーブ山講話では、恐ろしい将来が予告されているだけではありませんでした。確かにさばきに向かっていますが、救いもあるということが言われています。今日の箇所にも大きな慰めが語られていました。特に 22 節に、神が主権の御手を持ってご自分の民に究極的な害が及ばないように顧みてくださっていると述べられました。これはイエス・キリストを救い主として受け入れ、信じるすべての人に与えられる祝福です。神はさばかれるべき世にご自身の大切な一人子を送ってくださいました。それはその方がこれからかかる十字架の死の犠牲を通して、これにより頼む人々が神の前に罪の赦しを得、正しい関係に回復され、神がくださるいのちの祝福に生きようになるためです。その者にとって世の終わりの日、最後の日は恐ろしいものではありません。それはむしろ救いの日を意味します。この世が終わりに向かう中、私たちはこれからも色々な苦難に出会い、そのためにうめき、嘆き、叫び、疲労するでしょう。何とか少しでも良い状態になるように努力するでしょうし、またそうすべきでしょう。しかし私たちの願わない方向へこの世界の状況が進んで行っても、私たちはそれに驚かないことができます。それは必ずそうなることだと知っているからです。またそのただ中でも神の守りの御手の下に自分はあると知って平安でいることができるからです。そしてその苦難が頂点に達するただ中で、約束された救いはついにはっきりと現れます。このイエス様の御言葉によく聞いて、正しくこれからの将来と世界とを見る者とされたいと思います。様々な困難を経る中でむしろ希望をいよいよ大きくし、主が天の雲のうちに来られる偉大な日を楽しみとして、恵みにより、その救いに導き入れられることを日々待ち望む幸いな歩みへ導かれて行きたいと思います。